



羅針盤

大原 國章
Kuniaki Ohara

赤坂虎の門クリニック皮膚科, Visual Dermatology 編集委員長



「皮膚 Paget 病」と呼びましょう

本号は Paget 病の特集で、体裁としては総論と臨床アトラスの2部構成(+1)になっています。総論(Part 1)については、本症の疾患概念を明確にするための病理発生、病理所見、そして治療方針を決めるために必要な TNM 分類、具体的な治療において必須となる化学療法、そして最終的な帰結としての剖検、それぞれを経験豊富、新進気鋭の筆者に担当していただきました。また各論(Part 2)としては、私(大原)の過去の400例余の経験の中から、特徴のある病型を抽出してあります。さらに、より理解が深まるよう、Part 3として過去に私が執筆した鑑別疾患の論文を再掲しました。

本症については、過去に森俊二¹⁾、池田重雄²⁾、宮里肇³⁾によって優れた総説が書かれており、また最近では熊野公子、村田洋三が詳述した書籍⁴⁾も刊行されていますので、屋上屋を架すの感もありますが、私なりの工夫を凝らしたつもりです。

Paget 病の発症について、古い教科書では“下床の腺癌の表皮内進展”と書かれていて、一部の外国ではいまだにその通説が信じられています。その誤謬のものは、“乳房外 Paget 病 extramammary Paget's disease”という名称による、疾患概念の混同に由来しています。その詳細は p.238 の村田論文を読み、各論での実例を見ていただければ合点されると思います。この村田論文では、“下床の腺癌”の論議を通して、「眼光紙背に徹する」の言葉通り、過去の文献を検証的に読み込む重要性も語っていただきました。

このような混同を払拭するために、今後は“皮膚 Paget 病”という名称を採用すべきです。そうすれば、乳房(皮膚)に生じた“乳房外 Paget 病”という症例が、乳暈、乳頭の皮膚に生じた“皮膚 Paget 病”であって、乳癌の上皮内進展である“乳房 Paget 病”とは別概念であることが理解されるはずですが(p.248, 泉論文)。“骨 Paget 病”というものもあります。

Paget 病の臨床形態、病理所見、経過は教科書的な記述に留まらずに、多彩・多様な様相を呈しますので、各論においてその代表例を提示して、本症の理解を深められるようにしてあります。そしてさらに、臨床症状の chronology、病理所見のパラエティーを巻頭のトピラページ(p.237)にまとめましたので、通り過ぎないでじっくりとご賞味さい。

治療の要である手術については、ページ数の都合で割愛せざるを得ませんでした。筆者らの過去の論文⁵⁾を参照していただければ幸いです。私自身も高齢となったせいもあり、もし自分が患者の立場になったなら、なるべく低侵襲の手術を望むだろうと考えるようになりました。

文献

- 1) 森俊二: 日皮会誌 75: 21, 1965
- 2) 池田重雄 ほか: 臨床 24: 15, 1970
- 3) 宮里肇: 日皮会誌 82: 519, 1972
- 4) 熊野公子, 村田洋三: 乳房外 Paget 病—その素顔—, 全日本病院出版会, 2015
- 5) 大原國章, 大西泰彦, 川端康浩: Skin Cancer 8: 187, 1993